

「服育」国際フォーラム感想

第一部 アジア地域の民族衣装と服育

○ニック・スレイマン先生の講演のなかで、多文化理解の重要性について丁寧に解説され、マレーシアの多文化主義の先進的な事例が紹介された。チナタ・ナガシンハ先生からは、タイの衣服文化と生活環境について、伝統と現代が交差する場について、少数民族の様子も含め分かりやすい講演であった。衣服の文化がそれぞれの地域の社会環境や自然環境とマッチしながら、時代とともに変化している様子がよく分かるとともに、スライドも図版が多く大変印象的だった。その後、実際にファッションショーを通して、衣服の文化やその多元性について目に触れることができ、分かりやすく、また親しみやすい構成で展開されていた。異国情緒あふれる民族衣装が、ずっと身近かに入り込んでくるような、そんなプログラム構成が印象的だった。谷口先生、チナタ先生、ロスタ先生による解説によって、民族衣装がより親しみやすくなった気がする。(一般・女性)



○フォーラムの趣旨である衣食住という人間にとって欠かせない事項の中から「衣」の観点から協定校であるマラヤ大学の先生方からお話を伺いました。その中でもタイ・プラナコン大学のチナタ先生の講演内容は大変興味深いものがありました。歴史をどうしての「タイにおける衣」をご紹介いただいたのですが、気候・民族・王制政治に関連しタイという国を理解する上で大変役に立ちました。(一般・女性)



○タイからはチナタ・ナガシンハ先生(タイ・プラナコン大学)が、マレーシアからはロスタ・ハルン先生(マレーシア・ブトラ大学)がそれぞれの国の貴重な民族衣装をご用意していただき、「ファッションショー①: アジア地域における少数民族衣装」がおこなわれた。タイのモン族やマレーシアの先住民族(オラン・アスリ)の衣装は、想像していた以上にカラフルで、服全体に微細な装飾が施され民間の伝統技術の高さがうかがわれた。ショーの解説では、こうした伝統技術が今後失われないように研究・保存の必要性が提案されたことが印象的であった。(一般・男性)



○今回特に実際に現地で身にまどわれている各地の民族衣装を目にすることができた意義は大きかったです。タイやマレーシアの衣装はぴったりとしたものではなく、ゆったりとしたものが多かったです。汗の付着を防ぐとともに、紫外線を防ぐ効果があることを実感しました。また展示のスペースに飾られていた、ジャクンの人々の着る木の革でできた衣服には森という生活環境との融合を感じることができました。文化が人々の生きる環境との密接な結びつきの中で育まれたものであり、

それら文化の具現化したものとして衣服が在ることを理解できました。(中学校教員 社会・男性)

○ファッションショーで紹介された東南アジアの山地民族の衣装は、素材(麻、木の皮、綿など)や染めの工夫があり、通気性や防暑など地域の気候風土にあった生活の知恵が反映されていた。また、ビーズや刺繍などの装飾は、非常に繊細で美しかった。「衣」はその土地の文化を反映し、人間の営みを豊かにするものだと感じた。(学生・女性)



○ファッションショーではタイの山岳民族の民族衣装を着て参加したのですが、伝統的な衣装の中に非常に手の込んだ刺繍や色遣いがあり、この衣装自体にもその民族の歴史や想いが詰まっているのだらうと想像でき、大変貴重な体験をさせていただきました。多様な文化を理解する上で、言語・宗教・環境だけでなく「衣」も一つの大きな構成要素であると実感し、今後多様な文化・海外の国々を理解する上で非常によい経験と勉強をさせていただきました。(学生・女性)

○普段では見れないような民族衣装を見ることができて、さらには、着ることが出来てとてもいい経験になったと感じました。日本では考えられないような丈の長さであったり、装飾品がついていて、文化の違いというものをはっきりと感ずることが出来ました。ミャンマーの方が自国の衣装を着こなしていましたが、やはり、日本人が着るよりも外国の方が着られた方が似合っているなど思いました。

(学生・男性)

○今回は、タイやマレーシアの民族衣装を着るという、他ではまず機会が得られないような貴重な体験をさせて頂きましたが、準備の段階で机の上に広げていた状態での見た目より、実際に着てみたら意外に重かったり、逆に軽かったり、という発見がありました。また、着た状態で服を引き摺らないように気をつけて歩いたり、ファッションショーでより衣装を綺麗に見せる事が出来るように姿勢に気をつけたりと、普段は気にしないような自分の振る舞いまで注意して行動することにも繋がりました。(学生・女性)

第二部 コンサートと服育～環境にやさしい衣服～



○「ファッションショー②: きものルネッサンス～和服のリサイクル・リユース・リデュース(3R)～」では、京都五条にある彼方此方屋の田中京子氏から、日本の伝統衣服である着物を明治・大正・昭和といった時代別に紹介していただいたが、自国の文化でありながらこれほど文化的に変遷があったことについて興味深く鑑賞することができた。着物文化について再度見直す機会となった。(一般・男性)

○(株)チクマの藤田さんより環境にやさしい衣服についてのお話があった。会社での取り組みとして、衣類を作り出すときにかかるCO2排出量をタグづけする工夫が紹介されていたことが印象的であった。実際に服も展示されていたが、タグづけの工夫がされていることで消費する側の意識も変わるものだと感じた。(一般・女性)



○年中温暖なこれらアジア諸国の民族衣装に対し、四季をもつ日本の着物は、とりわけ機能性が重視されているようでした。たとえば、寒さに対して重ね着する、赤色の生地を用いることで視覚的に温かくする、家事の際に濡れないように裾を袋状にする、等の工夫が施されていました。(一般・女性)



○午前と午後ファッションショーに出演させていただきましたが、やはり日本の着物のほうがとても自然に歩けたと思います。この時私は、外国の民族衣装よりも、自分の国の民族衣装の方が体に合って動きやすいと思いました。(学生・男性)

○私はきものルネッサンスのファッションショーに参加し、黒の立派な着物を着て歩きました。着物を着るのは成人式以来でしたが、成人式で着た時の着物よりもずっしりとした重みを感じました。下駄を履いて歩きましたがとても歩きにくく、着物も重いために立っただけでもしんどく感じました。私は戦前の着物でしたが、戦後の着物もあり、戦前より軽く、動きやすそうなものでした。このようにしてだんだんと動きやすくカジュアルな服装に変化していったのだなと感じました。(学生・女性)



○日本の着物は、戦前より代々親から子へと受け継がれてきた。着物は、一枚の布になるのでリサイクルやつぎはぎなどの工夫で長く使用することができる。着物から日本人のものを大切に作る気持ちを強く感じることができた。(一般・女性)

第三部 災害から学ぶ生活の知恵～かけがえない命をめぐって～

○「自分たちに必要なものはすべてこの土地にある」という言葉には感銘を受けました。以前、お話を伺ったことのあるザ・ピーブルの吉田さんの「元気なまちには 元気な主張を続け 元気に行動する市民がいる」というスローガンにも家庭科教育の目標を感じていたのですが、今日は「身の丈にあった生活」という言葉にも家庭科教育を考えさせられました。(高等学校教諭 家庭科・男性)

○日本環境教育学会関西支部の菊地泰博氏からのお話では、私たちが経験した17年前の阪神淡路大震災について、あまり語られることの無かった行政の内側での取り組みについて知ることができ、災害に強い街づくりが提案され、勉強になり、減災教育の必要性を実感することができた。(一般・男性)



○NPO 法人法人ザ・ピープルの吉田恵美子氏からは、今回の東日本大震災の生々しい現実についてのお話を聞くことができた。震災直後の避難所の状態や体育館に山積みになった古着など、大規模災害における支援体制とその整備の重要性について知ることができた。
(一般・女性)

○国際的なフォーラムであることもあって、“文化の違い”を感じました。マレーシアの先生方がお祈りを始めたことも見るのは初めてでした。私が一番印象的だったのはパネルディスカッション時の吉田さんのお話です。被災地には必要な救援物資が届かず、必要でない無駄な物が届くという事実を知りました。吉田さんの話し方からも行政への不満を感じ、改めて被災地の苦しい現状を実感しました。
(学生・女性)



○チナタ・ナガシンハ先生からは、昨年タイの大洪水がどのような経緯でおこったか、自然環境の破壊と災害の関係、都市の脆弱性などについて伺うことができたが、こうした大災害においても気丈夫に立ち向かうタイ国民の力強さも知ることができた。(一般・男性)

○タイの洪水のなかでの日常生活は生きることの楽しさとたくましさを感じ是非生徒に伝えたいと思います。日常の生活がどのように世界と関わっているのか、生活の思いがどのように過去から未来へとつながっているか、限られた時間ですが生徒と共にこれからも考えていきたいです。(一般男性)

○(株)チクマの前田良治氏からは義援物資についての様々な問題点が指摘され、また服育の観点から救援者の衣服や古着の焼却とCO₂の排出、原発問題など多岐にわたる問題提起がなされたことが印象的であった。(一般・女性)



○ロスタ・ハルン先生からマレーシア先住民族(オラン・アスリ)の伝統的知識と生活の知恵や、悲劇が起こると人間同士が団結し、人間同士が、また家庭の中での人間関係が近くなり、災害に対処しようとする事、これが本来の人間社会において重要であること、そして彼らが自然環境において実に質素に暮らしていることが紹介された。さらに、マレーシア政府のオラン・アスリに対する責任(Responsibility)などがキーワードとして示された。(一般・男性)

○フォーラムの中で一番印象に残ったのは、第3部ロスタ先生の「生活の知恵とマレーシア先住民族(オラン・アスリ)の伝統的知識」である。先住民族の生き方について、”They are happy.”だと強調されていた。彼らは、その土地の風土に根ざしており、食物も必要なだけ捕獲し、家族とともに生活している。現代の日本人は、「自分たちは幸せだ」と胸を張っていえるだろうか。我々の「心の豊かさ」について問題を突きつけられた気持ちであった。物質的な欲に目をくらませるのではなく、精神的な豊かさをもっと見直していく必要があると強く感じた。(一般・女性)



○パネリスト間の討論が行われ、コーディネーターの谷口先生から、一つにはライフラインの問題、ローカルな環境が非常時には破壊されてしまうが、それをどのように回復するか、そのような時だからこそ一致団結する、人間同士の距離が近くなるのも事実であり、人間共同体の重要な部分がここにあるとの指摘があった。またオラン・アスリのようなシンプル

な生活、等身大の生き方をしていれば環境問題は起こることはなく、それは民族衣装にも現れている。さらに、いろいろなものの価値を認めて、二元論的ではなく、生と死も同様に、その中間で生きることが重要であると締めくくられた。(一般・男性)



全体の感想

○私は15・16日の準備と、17日のフォーラム当日に参加しました。二日間の練習期間があったので、フォーラム当日のファッションショーにはそれほど緊張せずに臨むことが出来たと思います。当日と準備に参加して強く感じた事は、体験してみないで見るだけでは分からないことがあるということでした。全体を通して考えても、ひとつの企画を実行するための準備がどれ程大変かを垣間見る事が出来たのではないかと思います。例えば、前日の準備は私の感覚としてはかなり遅い時間までやっていたという印象だったのですが、翌日、先輩方が更に遅い時刻まで残って準備していらっやったという話を聞いて驚くと同時に、今まで自分が当日だけ見学し参加してきた学会やフォーラムなども同様の準備の上で成り立っていると考えると、ぎりぎりまでの準備や確認が大切だという事を再認識出来ました。また、準備の段階では当日よりも先生方や企業の方とお話しさせていただく機会にも恵まれ、勉強にもなり、楽しかったです。こういった機会には当日だけでなく、準備から積極的に参加していきたいと思いました。(学生・女性)

○文化史においては世界の文化は非常に流動的です。国と国との交流が増すほどに、その国にとって重要な文化が侵されるという危険をはらんでいます。それはその人の育ってきた環境とある種の剥離状態を意味していると考えられます。この問題の打破には、環境教育で育まれるべきとされるような、関わりあう両者の共感的な理解が必要なのでしょう。

今回のフォーラムでは、衣服に結びついた文化的背景が示されました。また実物を目に

し、現地の人々の説明を聞いたことで、今回の参加者の多くに共感的理解が芽吹いたものと思われます。ゆえに「衣服」の観点から人と環境の関わりを見てきた今回のフォーラムは私にとってとても実りあるものとなりました。(中学校教諭 社会・男性)



衣服には機能性だけでなく、精神性も表現されているように思いました。自然の材質で作られる衣服には、自然環境への畏敬や崇拝、自然との融合が感じられ、煌びやかな装飾には王族や貴族のもつ威光といった意味合いもあるのではないかと感じました。

服育フォーラムのファッションショーで各国の伝統的衣装を見て、シンポジウムで「服」をテーマにした対話を聞くことから、各国の自然環境や文化に触れることができました。(学生・男性)



朝から長時間のフォーラムであったが、人間の生の基本的な部分である衣食住、特に衣について、一つには民族衣装を通して、また他方で災害の経験を通して見つけ直す機会になり、そこから重要な生き方の糧を得ることができたのではないだろうか。衣食住という人間の生活に基本的な部分から、様々なことを学ぶよい機会であった。(一般・女性)

私は8年程、アパレル業界にいたこともあり、伝統的な民族衣装がもつ魅力や、その文化的・精神的な役割に元々強い興味がありました。今回、私はタイの山岳民族モンの現代風にアレンジされた衣装を着用させていただきました。じつは、私物でもモン族の現代風プリー

ツスカートやアクセサリーを数点持っており、普段着に取り入れているほどです。

10年程前からファッション市場には「ロハス」というキーワードがはじまりましたが、最近には特に若い子育て世代を中心に、伝統的なもの、環境に配慮して作られたもの、フェアトレードのもの、子どもたちの未来に残していけるものについて、関心を持つひとが増えているように感じます。地元のフェアトレードショップ等で外国の手仕事による商品に触れる機会が増えるにつれ、一部の特化された人たちだけでなく、一般的な消費傾向もサステナビリティな方向性へとゆっくりと進んでいると、個人的には実感しています。

私は、それら付加価値がつけられた商品についてくるさまざまな紹介ポップやパンフレットなどを読んで、少数民族や様々な社会背景についても理解している「つもり」でございました。

しかし、実際にファッションショーの現場で外国人の先生方や留学生の方々と交流してみて、そのわかった「つもり」が、実は非常に傲慢な意識であり、まさに頭の中だけ・知識だけのものであることに気づきました。

今回のショーでは、予定していた中国の留学生の方が急病で出られなくなるというハプニングもあり、急遽日本人の代役の方がミャンマーの衣装を着ることになりました。出番まで時間がなく、焦った私が適当な組み合わせで急遽サイズを修正して着付けをしてしまいました。

本来なら、アイテムや色の正しい組み合わせがあり、それぞれの文様にも意味があるものなのに、悪気はなかったのですが、大変手荒な事をしてしまったと思います。ですがミャンマーの留学生の方は私を責めることなく、正しい着方や文様の意味を優しく教えてくれて、出番に間に合うようにそっと直してくれました。自国の衣装を、非常に丁寧に扱われていました。

自分に置き換えて考えてみると、日本の着物を手荒に扱われたり、間違った着方をされたら不快を感じると思います。

このように、他の国の人の謙虚さや優しさ、自身の相手に対する敬意に欠ける態度や無意識の傲慢さに気づけるような現実的な体験が、今回の参加で私にとって一番の学びになりました。そのミャンマーの方とはその後一緒に展示を見てまわり、東南アジアの国々について色々お話をしました。

伝統的な衣装には大量生産されワンシーズ

ンで終わる衣服とは違い、文化や歴史のエッセンスが凝縮されていて、身につけると気分が高揚します。

この身に着けて「感じる」ということがとても大切なのではないかと思います。

私はタイの衣装を着させていだいて、何か「誇り」のような意識がわきました。

その誇りは、自己顕示欲や傲慢さからくるものではなく、長い時間をかけて積み重ねた小さな日常生活のひとつひとつを結晶にして、他者に披露し表現するような、謙虚さと中身を併せ持った「誇り」だと思います。

そのような意識は、これからの社会を持続可能なものにしていく為に、とても大切なものではないでしょうか。このようなことを肌で感じ、服を通して改めて考えてみる機会を頂けて、本当に良かったと感じます。谷口先生はじめ関係者の方々に感謝申し上げます。有難うございました。(大学職員)

